

ホームページに世界の大学戦略を見る

スタディ・アブロードプログラム

海外の大学における教育の国際化戦略

山田礼子 同志社大学教授

世界的に急速に進展する教育の国際化

近年、日本の大学にとって教育の国際化を進展させることは重要な生き残り戦略のひとつとなりつつある。教育の国際化には、留学生の確保のみならず、グローバルスタンダードにあわせて、いかなる言語で授業を提供するか、どのようなタイプの授業方法を取り入れていくか、あるいは自国の学生を海外で研修や体験をさせる機会をどう提供するかといったことも含まれている。

こうした動きは世界中の高等教育機関で急速に進展している。特に留学生という点に焦点を絞ってみれば、高等教育への財政援助が縮小する環境では、高い授業料を支払ってくれる留学生は、大学に安定した財政をもたらす重要な資源であるとみなされていることから、世界中の高等教育機関が留学生の確保に熱心になるわけである。

例えば、オーストラリアの高等教育機関における留学生募集戦略はアグレッシブといっても良いほど積極的に留学生獲得を目指している。このようなオーストラリアの高等教育機関の積極的な留学生募集は、1985年にフルコストの授業料を学生に課すという政策変更にもなってきた。その結果、1984年にわずか1万5000人であった留学生は1998年には7万5000人、2000年には8万9000人へと実質的に急激な増加を示してきた。オーストラリアだけでなくヨーロッパ諸国においても、EU域内の学生の相互交流が盛んになることを目指したエラスムス計画が導入されて以来、定期的にEU内の高等教育機

関に在籍する留学生の数は増加してきている。

学位の提携など大学制度も国際化

今回は、教育の国際化について世界の大学の動向を見ていくことにしたい。

高等教育の国際市場は3000億ドルにもおよぶ巨大産業といわれている。そのなかでもヨーロッパの国際市場は、1990年代後半から現在にかけて年率7%の割合で成長している。高等教育の国際化については、かつての動向と現在の動向の差異のひとつとして挙げられることは、現在では国境を越えて大学同士が提携しあう大学が増加している点だ。具体的には、ある国の大学が別の国にキャンパスを開校したり、海外の大学との連携によって学生が両方の大学から学位を取得できるなど、国境を越えての国際的な連携が活発になっている。

また従来は、学生は留学先の大学から学位を取得するケースが通常であったが、現在では留学先の大学が提供するプログラムの一部を学生の所在している国の大学が引き継ぎ学位を授与するような形態も誕生している。それらの学位は部分学位プログラム(twinning degree, split degree program)と呼ばれている。一方、学生の所在国等の学校がプログラムのすべてを請け負い、学生は大学在学中の全期間のプログラムを本国において履修するという形態も存在している。この形態を通じて取得した学位は外国機関提携学位(partner-supported delivery)と呼ばれている。このようにグロー

バル化の進行に呼応する形でこれまでとは異なる国際化した大学制度が続々と誕生している。

注目されるスタディ・アブロードプログラム

もうひとつの大きな潮流は海外留学プログラムの活発化と多様化である。学生はグローバル化のなかで、流動的に高等教育を求めようようになってきている。その代表例が大学のスタディ・アブロードプログラムである。日本でも、2007年7月に公表された中央教育審議会大学分科会制度・教育部会 学士課程教育の在り方に関する小委員会による「学士課程教育の再構築に向けて」において、学士課程共通の「学習成果」に関する参考指針として各専攻分野を通じて培う「学士力(仮称)」が明示された。そのひとつに「多文化・異文化に関する知識の理解」があげられている。同様に、他国の大学においても、「多文化・異文化に関する知識の理解や体験」は大学生が身につけるべき重要な力としてみなされている。例えば、ハーバード大学が2006年に明らかにした一般教育対策本部による報告書においても世界の他の文化や文化的多様性を理解することの重要性が指摘されている。オーストラリアのメルボルン大学においても「国際性かつ世界観を備え、社会的、文化的多様性の理解を十分にできること」という項目が、卒業生が身につけるべきアトリビュートとして明示されている。そうした動向を反映して、多くの国においてスタディ・アブロードプログラムの充実が図られ、学生自身も大学の支援を受けて、プログラムに参加するようになってきているわけだ。

ノッティンガム大学のスタディ・アブロードプログラム

エラスムス計画の普及の効果もあり、2003年にはヨーロッパにおいては200万人の大学生が海外留学をしているという。その中でもイギリスにはEU諸国から11万2000人を超える学生が留学しているというが、イギリスの大学から海外に留学する学生についてはどのような状況だろうか。ここで、ノッティンガム大学のスタディ・アブロードプログラムを見てみよう。ノッティンガム大学はノッティンガムにある名門の総合大学である。

ノッティンガム大学には5つのスタディ・アブロードプログラムがある。それぞれの概略を示してみよう。http://www.nottingham.ac.uk/international/_media/pdf/mobilityteam/Study%20Abroad%20Opportunities%20booklet%2008-09.pdf

国際的な研究大学が加盟しているUniversitas 21(U21)という国際コンソーシアムによる交換留学プログラムは、ノッティンガム大学の提携先の大学に正規留学生として学生を送り出すプログラムである。例えば、オーストラリアではメルボルン大学、クイーンズランド大学、ニューサウスウェールズ大学の3校が加盟しており、カナダからはプリティッシュ・コロンビア大学、ニュージーランドからはオックランド大学等、アメリカやアイルランドも含めると圧倒的に英語圏の大学がU21の加盟大学であることがおもしろい。英語圏以外では、韓国の大学と中国の北京大学と復旦大学など参加大学数はかなり限られている。

エラスムス計画はEU内の交換留学プログラムであり、このプログラムはノッティンガム大学と学科あるいは学部やスクールを基準に提携している大学に交換留学生として留学するように設計されている。これに対し、EU以外の提携している海外の大学に留学生として学ぶプログラムが、国際留学プログラムである。

次に述べるキャンパス内部交換留学プログラムは、新しい高等教育の国際化の流れを反映して誕生したプログラムとみなされるだろう。つまり、ノッティンガム大学は海外キャンパスをマレーシアと中国に設置しているが、海外キャンパスに設置されている教育課程と同じ内容を本国のキャンパスで履修している学生のみがこのプログラムに応募することができるというものである。

最後の短期間海外研修プログラムやサマースクールは留学先での単位が必ずしも認められるわけではないが、全学生に機会が開かれ、多くの学生がこうした機会を利用することが奨励されている。

それではアメリカの全体的な動向はどのような状況であるのだろうか。2004-05年にかけてアメリカの学生が海外留学をした比率は前年度比で7.7%増加し、20万人以上の学生が海外で学んでいるといわれている。最も人気のある地域は西ヨーロッパであるが、最近ではイン

ドを留学先として選ぶ学生も増加しているという。その背景には、異文化を体験できる一方で、インドの大学では英語が使用言語であることから大学での学習を英語で学べるということが魅力的であるようだ。

ノッティンガム大学の事例にも見られたように短期海外留学がアメリカでも現在大いに奨励されているようだ。実際に、アメリカ人学生の海外留学数は増加しているが、“Junior Year Abroad”という1年間の留学パターンに比べて滞在期間が短くなる傾向にあるようだ。

アメリカにおける日本学を学ぶプログラム

次に、日本語、日本文化などを学ぶ日本学教育を目的としたスタディ・アブロードプログラムを紹介してみよう。アメリカの大学の日本へのスタディ・アブロードプログラムとして、アメリカを代表する15の名門のリベラルアーツ大学が設置したプログラムがThe Associated Kyoto Program(AKP)である。

<http://www.associatedkyotoprogram.org/welcome/theakp.html>

京都の同志社大学を拠点として、毎年40人ほどの学生が、日本語の集中的な学習と英語による日本に関連し



<http://www.associatedkyotoprogram.org/welcome/theakp.html>

た授業を受講しながら、2学期間学習する。AKPに加盟している大学は、アーモスト大学、ベイツ大学、バックネル大学、カールトン大学、コルビー大学、コネチカット大学、ミッドベリー大学、マウントホリヨーク大学、オベリン大学、ポモナ大学、スミス大学、ウェズリー大学、ウェズリアン大学、ウィリアムズ大学、ウィットマン大学の15のリベラルアーツ大学であるが、リベラルアーツ大学によるスタディ・アブロードプログラムという特徴が主に人文系や社会科学系を中心とした授業内容に反映されている。本プログラムが、1972年に開設されて以来、1300名の留学生在が日本文化を体験し、日本に関する見識を深めるなど、アメリカにおける日本理解に大きな貢献を果たしてきている。

AKPプログラムは日本語プログラムと選択授業からなる合計32単位のプログラムである。

<http://www.associatedkyotoprogram.org/akpnow/curriculum.html#0708>

日本語プログラムでは、学生のコミュニケーション技能と文章作成技能の修得に力が注がれているだけでなく、日本料理、書道、アニメ、漫画、新聞の読み方などのワークショップも開かれており、体験をしながら日本語を修得するように工夫されている。

選択科目は、1学期に2科目を英語で受講するように構成されている。担当する教員は、アメリカから参加している加盟大学の教員と同志社大学の教員等である。授業は、理論や知識を座学で学ぶことに加えて、フィールドトリップ、ゲストスピーカーによる授業、フィールドリサーチなどの体験を通じて日本文化を学べるような工夫がこらされている。ユニークな授業はジョイントセミナーと呼ばれる形式の授業であるが、これはAKP参加学生と同志社大学の学生がともに学ぶ授業で、英語で提供されている。同志社大学の学生がこの授業に参加する場合には、TOEFLの得点や上級レベルの英語の授業の履修経歴を審査された上で参加が認められるが、日本人学生にとってもアメリカ人の学生とともに学ぶことを通じて、自国にいながら異文化を体験できる意味は大きいと好評である。

このように現在世界の多くの国々が自国の学生に留学や海外体験をさせることに熱心であるだけでなく、自

国への外国人学生の受け入れもいずれの国々も大変熱心になってきている。しかし、2001年の9・11以降、それまで留学生の受け入れが最も多かったアメリカが留学生の受け入れに対して厳しい条件を課したり、アメリカにいる外国人留学生や交換訪問者の滞在資格情報をより効果的に管理するためにSEVIS(Student and Exchange Visitor Information System)プログラムが発足したこともあり(http://www.ice.gov/doclib/sevis/pdf/sevis_japanese_fs.pdf)、2003年のF-1ビザ(留学生ビザ)取得者は9・11以前に比べて27%減少したことが、アメリカ国務省によって明らかにされている。

一方、留学生受け入れに熱心な国のひとつであるオーストラリアでは、外国人学生数は順調に増加しており、その結果、高等教育はオーストラリアの主要な外貨獲得の源となっているようだ。

海外にキャンパスを設置する動きも活発に

さて、次に忘れてはならないのが海外にキャンパスを設置する大学の増加である。アメリカから正式に認可された教育施設やプログラムは世界におおよそ400存在しているという。イギリスやオーストラリアの大学も海外にキャンパスを設置しており、これらの海外キャンパスでは所在国の大学と連携して学位を授与したり、所在国の学生が海外に留学せずに自国にある海外大学のキャンパスで学ぶことも可能になっている。アメリカの大学が9・11以降留学生の受け入れに寛容でなくなっていることは前述したが、その一方でアラブ諸国に海外キャンパスを設置するアメリカの大学も増加している。例えば、カタールにはカーネギー・メロン大学、テキサスA&M大学、バージニア・コモンウェルス大学等、アラブ首長国連邦にはジョージ・メイソン大学やニューヨーク州立大学バッファロー校等がキャンパスを開校している。

ジョージ・メイソン大学は2006年にアラブ首長国連邦にキャンパスを開校した。

<http://gazette.gmu.edu/articles/7435/>

自国の学生がアラブ諸国の文化を学び、外交や政策立案にとってしばしば大きな障害となる偏見や文化的衝突を和らげるための文化の多様性を学ぶという目的と同



<http://gazette.gmu.edu/articles/7435/>

時に、アラブ諸国やインド、パキスタンなどの学生がアメリカまで留学しなくても、より近いアラブ首長国連邦にあるキャンパスで学ぶことを可能にすることで、より多くの外国人学生を獲得するという国際戦略のひとつでもある。すなわち、アラブ首長国連邦のキャンパスで学んだ後、アメリカのキャンパスで学んで学位を取得したり、海外キャンパスで学んだ後に、大学院のみをアメリカのキャンパスで学べば、それだけ留学費用のコストは低く抑えられる。同時に、アメリカ人学生にとっても、短期間の留学や海外研修先としてこのキャンパスを持っていることで、学生は効果的な海外体験ができるという戦略である。

e-ラーニングなどによるテクノロジーの進歩が海外キャンパスでの学習をより容易にすることもあり、今後は国際的な大学連携が活発化していくものと思われる。日本の大学においても、早稲田大学が中国にキャンパスを開校するなどの動きが見られる。グローバル化が急速に進んでいる状況では、学生が異文化を体験し、さらに異文化や多文化を理解する能力は世界が求める標準的な技能や能力であることは疑いの余地はない。このような動向を前提として、高等教育の国際化戦略を立案することが日本の大学にも大いに求められている。